



貨幣に刻まれた統治と信頼の物語

パリ事務所からほど近くにある凱旋門は、ナポレオンの戦役の象徴です。

後に皇帝として戴冠されるまでになったナポレオン。彼は軍事面だけでなく、フランスの中央銀行を設立して、通貨制度を整えるなど、内政にも注力しました。

ナポレオンは現在のスペインからオランダ、イタリアに至るまで、自身の肖像を彫刻した貨幣を広く流通させた、と聞いて興味を持ち、パリの貨幣博物館を訪れてみました。

職員の熱心な説明によると、ナポレオンは通貨を通じて自身の影響力を高めるため、時に強権的な手段も取ったようです。征服地の通貨に従来刻印されていた肖像を、自身の肖像で上書きすることもあったとか。

しかし、それがどこでも通用したわけではありません。例えばオランダ。当時交易で栄え、強い経済力を有していたために、征服後も従来の貨幣が根強く残ったようです。

そんな時、ナポレオンは、新旧貨幣の混在を認めたそうです。彼は「土地ごとの事情に ménager (=配慮) することをよく心得ていた」と職員は語ります。こうした柔軟な態度が、為政者として信頼を得るのに重要

だったのかもしれません。

ところ変わって、ナポレオンが進軍した地域の中には、ちょっと変わった刻印を持つ貨幣が流通していた例も。フランス軍が1798年に上陸したマルタ(地中海の島。2008年にユーロ加盟)では、それまで長い間、十字軍(聖ヨハネ騎士団)の鋳造する貨幣が使われていました。

握手のマークが刻まれた貨幣は、特に興味を引きます。マークの周りに、「銅ではなく信頼(NON AES SED FIDES)」と彫られているのです。

この言葉、モノやサービスの対価として必ず受け取ってもらえるという貨幣への信頼抜きには成立しない、貨幣取引の本質を表しているのかもしれません。過去には、マルタ中銀がこの貨幣の特別展を開催したり、社会学者のジンメルが著作で取り上げたりと、なかなかの人気者です。

それにしても、信頼が重要だという、ありふれた主張をわざわざ貨幣に刻むとは。きっと、経済が発展するためには人々の通貨への信頼が不可欠だと、当時の為政者はよく知っていたのでしょう。

(日本銀行パリ事務所)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



セーヌ川沿いにある、パリ造幣局(Monnaie de Paris)の貨幣博物館。一般見学ができます



肖像の耳のあたりに、ナポレオンの小さな横顔が見えるでしょうか？

© Monnaie de Paris, coll.historiques



握手のマークと、縁の文字(「銅ではなく信頼」)が特徴的なマルタの貨幣

© Melvin Bugeja, Central Bank of Malta